



しょうじ

ぼれい

じおう

うこん

トウガン

うばい

シソシ

オタネニンジン

コウカ

ビャッキョウサン

クイジ

ブクニン

温裏剤の臨床応用

黄懷龍

一、概 論

主に温熱性の薬物で組成され、去寒温裏の効能を持ち、裏寒証を治療する方剤である。

《内経》の「寒はこれを熱す」という治療原則に基づいて作られた方剤である。

中医治法「八法」中の「温法」に属する、「祛寒剤」とも呼ばれる。

温裏剤は、温中散寒、温経散寒、回陽救逆などに分類されている。

●裏寒証とは

陽虚により虚寒が内生され、或は外寒に直接侵入され、或は誤治により陽気が損傷されるなどにより、体内に陽気虚弱と陰寒内盛を病理特徴とする症候である。

症状は寒がり、四肢冷え、顔色は白い、嘔吐清涎、腹冷痛、口渇がない、尿は清澄多量、軟便下痢などである。

重症では、四肢厥冷え、神疲下痢、或は大汗淋漓、息切れ、浮腫を伴い、舌淡白脈微など陽気虚脱（ショック）の症状が現れる。

二、組成薬物

主に附子、乾姜、桂皮、細辛、呉茱萸、人参など辛熱甘温の薬物で組成される。



附子

桂皮

細辛

呉茱萸

三、効能効果

温中散寒、回陽救逆、温経散寒などの効能を持っています。

①胃腸の消化吸収機能を高め、エネルギーを補充して、消化機能の低下、カロリー不足、代謝低下の症候に用いられる。

②心臓機能を増強し、血管運動中枢及び交感神経を興奮させ、血圧を上昇させ、循環を改善させる。臨床では、循環器が機能低下している症例に用いられる。

四、主 治 （裏寒証）

1、脾胃虚寒証：脘腹冷痛、喜温喜按、食欲不振、悪心嘔吐、軟便下痢、倦怠感、手足冷え、口渇なし、舌が淡白、苔が白滑、脈沈細或は遅緩などである。

2、陽虚寒凝証：四肢冷え、肢体痺れ、冷痛、腹痛、脈沈細の寒凝痺痛、或は虚寒陰疽（虚寒性動脈閉塞性壊死）など。

3、陽衰陰寒内盛証：

元気がない、悪寒倦臥、四肢厥冷、下痢清穀、舌淡苔灰白潤、脈沈微或は沈弱。或は大汗淋漓、息切れ浮腫を伴う。

五、分 類

- (一) 温中散寒剂：人参湯、呉茱萸湯、安中散、大建中湯など。
- (二) 温経散寒剂：当帰四逆加呉茱萸生姜湯、当帰四逆湯など
- (三) 回陽救逆剂：参附湯、四逆湯、独参湯など。

六、注意事項

温裏剤の多くは辛燥温熱の薬物で組成されるため、臨床応用する際に以下を注意しなければなりません。

禁忌：熱証、陰虚証、真熱仮寒証
慎重：夏の炎熱時期、平素陰虚火旺の体質に、使用量を控えめに、治ったらすぐに中止すること。

七、代表的方劑

(一) 溫中散寒

人參 湯：溫中散寒、補氣健脾 → 中焦虛寒、昇降失調

吳茱萸湯：溫中降逆、暖肝散寒 → 肝寒犯胃、濁陰上逆

小建中湯：溫中補虛、和裏緩急 → 中焦虛寒、脾虛肝乘

安中 散：溫中降逆、理氣止痛 → 寒濕困脾、胃脘冷痛

大建中湯：溫中補虛、降逆止嘔 → 中焦陽虛、陰寒上逆

(二) 溫經散寒

當歸四逆加吳茱萸生姜湯：溫經散寒、養血通脈、降逆

—————→ 血虛寒凝、濁陰上逆

當歸四逆湯：溫經散寒、養血通脈

—————→ 血虛受寒、寒凝肝脈

黃耆桂枝五物湯：補氣溫經、和宮通痺

—————→ 宮衛虛弱、絡阻血痺

(三) 回陽救逆

參附湯：補氣溫陽、回陽固脫 → 大病極弱、陽氣暴脫

四逆湯：溫陽逐寒、回陽救逆 → 陰寒內盛、亡陽虛脫

獨參湯：益氣固脫、益氣生血 → 元氣虛衰、氣隨血脫

人 参 湯 「傷寒論」

1、組成と特徴

人参湯は辛熱の乾姜を主薬で組成され、温中散寒、補気健脾により、脾胃虚寒の胃痛、悪心嘔吐、下痢などを治療する代表方剤である。

組 成	人参、乾姜、炙甘草、白朮
効 能	温中散寒、補気健脾
主 治	脾胃虚寒証

人参湯の組成と応用

- 乾姜 — 温中散寒
 — 和胃止嘔
- 人参 — 大補元氣
 — 健脾固攝
- 白朮 — 健脾燥湿
 — 補助人参
- 炙甘草 — 益氣和中
 — 調和諸藥

温中散寒、補氣健脾

中焦虚寒、昇降失司

病機	症状
脾虚不運 昇降失司	— 食欲不振 — 惡心嘔吐 — 軟便下痢
陽虚内寒	— 四肢冷え — 胃冷痛 — 口渴なし — 舌淡滑 — 苔白滑 — 脈沈遅

脾胃虚寒証

2、人参湯の適応症

主に中焦虚寒による脘腹冷痛、嘔吐下痢、寒がり、四肢冷え、口渇なし、尿清長、舌淡苔白、脈沈細或は遅緩無力など証候に適応する。

3、人参湯の臨床応用

①脾胃虚寒（お腹の冷え）の脘腹冷痛、軟便下痢、悪心嘔吐、四肢冷えが現れる急慢性胃炎、胃腸炎、消化性潰瘍、胃アトニー、腸炎などに用いられる。

②加減：胃冷痛が酷ければ、安中散を加え、腹冷痛、下痢の水分がひどい時に、真武湯を加えて、嘔吐よだれがひどければ、小半夏加茯苓湯を加える。

4、人參湯の応用ポイント

虚寒症状：寒がり、四肢冷え、倦怠感、顔色白い、口渇なし、尿清長、舌淡白苔白滑、脈沈遅無力。

脾胃気虚：食欲不振、胃、腹部が冷痛、押さえたり温めると減少する、悪心嘔吐、軟便下痢など。

人参湯から派生した方剂

人参湯 (人参、乾姜、炙甘草、白朮)

—炙甘草、白朮
+山椒、膠飴

大建中湯

温中補虚
降逆止痛

+炮附子

附子理中湯

温陽散寒
益氣健脾

+桂皮
附子

桂附理中湯

健脾益氣
温中散寒

+桂枝

桂枝人参湯

温里解表
益氣消痞

呉茱萸湯「傷寒論」

1、組成と特徴

呉茱萸湯は辛熱燥性の呉茱萸を主薬に組成され、暖肝散寒、温中降逆し、「傷寒論」で陽明寒嘔、少陰下痢、厥陰頭痛を治療する代表方剤である。

○

組 成	呉茱萸、人参、生姜、大棗
効 能	暖肝温中、降逆止嘔
主 治	肝胃虚寒証

呉茱萸湯の組成と応用

- 呉茱萸 — 温肝暖胃
— 散寒降濁
- 生姜 — 辛温散寒
— 暖胃止嘔
- 人参 — 補中益氣
— 健脾扶正
- 大棗 — 甘緩和中
— 制辛燥品

暖肝温中、降逆止嘔

肝寒犯胃、濁氣上逆

病機	症状
肝寒胃逆	乾嘔 吐涎沫
寒凝氣滯	腹痛 頭頂痛
邪犯肝經	痛欲嘔
寒停中虚	口不渴 舌淡滑 苔白 脈弦遲

肝胃虚寒証

2、呉茱萸湯の適応症

主に肝胃虚寒、濁陰上逆による乾嘔吐、涎沫、頭頂痛或は胃痛、口渇なし、舌苔白滑、脈沈遅など肝胃虚寒証に適応する。

3、呉茱萸湯の臨床応用

- ①嘔吐よだれで、ゲップが現れる急、慢性胃炎、消化性潰瘍、胃食道逆流症、妊娠嘔吐などが肝胃虚寒、水飲上逆の症候に用いる。
- ②片頭痛、神経性頭痛、メニエール症候群などに寒冷刺激で起きる肝胃虚寒の者に用いる。

4、吳茱萸湯の応用ポイント：

- 胃寒嘔悪**：吐き気、嘔吐、つばやよだれが多い、
口渇なし、舌苔白滑、脈沈遅など。
- 寒凝疼痛**：濁陰上逆、寒凝筋脈による片頭痛、
頭頂痛、神経痛、胃痛など寒冷刺激
で起きる者。

人参湯と呉茱萸湯の比較

	人参湯	呉茱萸湯
共同	温中散寒で、中焦虚寒証を主治する方剤である。	
組成	人参、乾姜、炙甘草、白朮	呉茱萸、人参、大棗、生姜
効能	温中散寒、補気健脾	暖肝散寒、温中降逆
主治	脾胃虚寒証	肝胃虚寒証
病機	脾胃虚寒、温運不能	肝寒犯胃、濁陰上逆
症状	倦怠感、軟便下痢、胃冷痛、悪心嘔吐、寒がり、口渇なし、舌淡苔白滑	嘔吐清涎、頭頂痛、胃冷痛、口渇なし、舌淡苔白滑

当帰四逆加呉茱萸生姜湯

1、組成と特徴

温経散寒の桂皮、細辛と養血通脈の当帰、芍薬を配合して、更に温中降逆の呉茱萸、生姜を加えて、血虚、寒凝肝脈の四肢冷え、肢体冷痛など血虚寒凝証を治療する代表方剤である。

組 成	当帰、桂皮、芍薬、細辛、炙甘草、木通、大棗、呉茱萸、生姜
効 能	養血通脈、温経散寒、止嘔
主 治	血虚寒凝証

当帰四逆加呉茱萸生姜湯

- 当帰 補血活血
- 芍薬 補血活血
- 桂皮 温経散寒
- 細辛 温経散寒
- 木通 通経利水
- 炙甘草 健脾和中
- 大棗 健脾和中
- 呉茱萸 暖肝散寒
- 生姜 暖肝散寒
- 生姜 温胃止嘔

温経散寒、養血通脈

血虚受寒、寒凝肝脈

病機	症状
血虚受寒	四肢冷え 脈が沈細
寒凝肝脈 衝任凝滯	少小腹痛 月経痛 月経不順
寒飲犯胃	悪心嘔吐 胃冷痛 口渴なし 舌淡 苔白滑

血虚寒凝証

2、当帰四逆加呉茱萸生姜湯適應症

素体血虚、又感受寒邪により、四肢冷え、下腹部、少腹部の冷痛、生理痛、舌淡苔白、脉沈細、或は嘔吐、頭痛、胃痛などを呈する血虚寒凝証に適應する。

3、当帰四逆加呉茱萸生姜湯臨床応用。

- ①冷え症で、素体虚弱、低血圧、貧血、四肢冷え、肢体しびれ、しもやけなど証候に。
- ②肢体冷痛で、頭痛、肩こり、腹痛、腰痛、坐骨神経痛、生理痛、子宮内膜症、或は胃痛、嘔吐など寒冷刺激で起こる症候に。
- ③動脈血行障害、レイノー現象、閉塞性血栓性動脈炎、脱疽など。

4、当帰四逆加呉茱萸生姜湯の応用ポイント：

冷え症：四肢冷え、寒がり、顔色蒼白、体質が虚弱、しもやけ、舌淡白、脈沈細。

肢体冷痛：肢体しびれ、痛み、下腹部が冷痛、腰痛、或は胃痛、嘔吐を伴う。寒冷刺激で起きる者である。

八、温裏作用がある方剤

真武湯（温陽利水） 八味地黄丸（補益気血）

桂枝加朮附湯（調和営衛、散寒去湿）

大防風湯（補益気血、去風寒湿）

麻黄附子細辛湯（散寒助陽）

葛根加朮附湯（調和営衛、散寒去湿）

当帰芍薬加附子湯（補血健脾、除湿散寒）

芍薬甘草附子湯（柔肝解痙、扶陽益陰）



ありがとうございました！